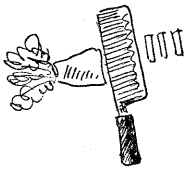
現職研究レポート

その一　H幼稚園の場合

角能清美



幼児教育現職研究会の昭和五十三年度の活動は次のように行なわれた。東京及び東京近郊の八幼稚園が協力園となり、公開観察をし、それぞれの幼稚園がそのとき持っている独自の課題を明らかにし、自分たちの保育を見つめ直す作業をしたのである。

今回は、その第一報として、H幼稚園の場合を報告する。H幼稚園の公開観察日は五月十六日、第二火曜であった。この頃は四月に入園した子どもたちがやっと幼稚園に慣れ、自分の遊びを見つけて遊び出そうとする時期であった。

観察者たちはまず幼稚園の子どもたちがのびやかなことを感じた。ところがあまりにものびやかなためにけじめをどこでつけるのかという疑問も提出された。特に子どもたちの動物の扱い方が注目された。うさぎやハムスターが子どもにそっと抱かれている時には微笑えんでいられる保育者が、ハムスターを放り出したり、箱詰めにしたり、あるいはザリガニが砂場で子どもに遊ばれているのを見ると、顔をしかめたくなってしまう。ちょうどこの頃、うさぎの「くろ」がケガをするという事件もあり、H幼稚園の先生方は動物の扱い方をどのように子どもに伝えたらいいのか、悩んでいたのだった。

「あさきたら，すぐにだっこするの」

そこでH幼稚園では「保育の中で動物をどう考えるのか」という課題が成立した。この課題のもとにそれぞれの保育者は様々に考え、実践していった。

保育の中で動物をどう考えるのか

各々保育者は、これまでの自分と動物との関わりをとらえ直すことからはじめた。保育者自身が動物に慣れないためになかなか触れることができなかったことや、やっと本来の自分を出してきたと思われる子どもたちに確信をもって「禁止」の声をかけられなかったことなどが挙げられた。

では保育者がどのような思いで動物を子どもたちの中に参加させたのだろうか。五月から新しく登場したうさぎの「くろ」をめぐって、担任のS先生の報告を掲げよう。

◈「くろ」がくるまで

四月。年少児三クラスを解体して、新しく年長の「つきぐみ」として集まった二十九人の子どもたち。女児は全体的に静かな活動を好む子が多く、男児は一人一人が違った活動をはっきり示し、二、三人で散らばって遊ぶ傾向があった。

その中でM男のことが気になっていた。M男は定まった友だちはいないが、ブロックや木工などを黙々と作り上げていく創造力の豊かな子どもであった。しかし妹のM子が年少組に入り、M男は妹のことが気になるのか、M子のクラスにずっと出入りしていた。M子が兄であるM男とは関係なく、他の友だちをつくっていくことに対

して、何かすっきりしないらしく、M男本来の活動ができないでいた。

M男は年少組の頃から動物が大好きであり、自分の分身のように扱った。「ジャンボ」という名の大きなうさぎを軽々と抱きあげて遊んでいたものである。「ジャンボ」は年少組で飼われているため、現在ではM男は二匹のハムスターを両手にもって、一日中歩き回って過していた。M男は自分の安定しない気持ちを手の中で動き回るハムスターに慰めを求めているように見えた。

一日中M男の手の中にいるハムスターは小さく、私は心配だった。M男のためにもっと大きな動物を飼いたかった。M男のためばかりでなく、ばらばらと散らばっているクラスが何かを育てることでひとつになるのではないかと思った。そこにちょうど卒園児の父兄から「うさぎを寄付したい」との申し出があり、私は飛びついた。

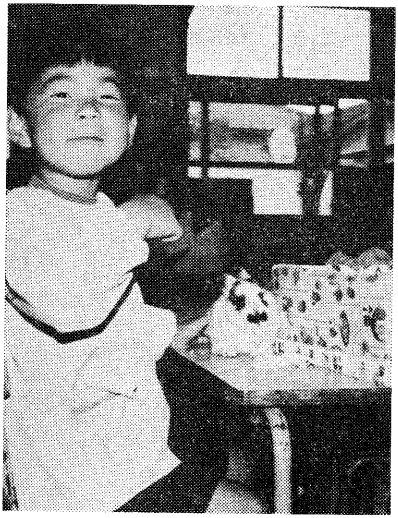
S先生は、クラス全体がばらばらしている状況を見て、どうにかならないだろうかという思いの中で、特にM男に目が向いていた。妹が入園してきたためにM男は不安定になっており、ハムスターを抱くことで安定するように努めていると考えた。もっと大きな動物をM男に与えたいという願いと、クラスで動物を育てることによって、クラスの子どもたちがひとつになってくれたらという願いのもとに、うさぎが「つきぐみ」の子どもたちにもたらされた。

さて、子どもたちはうさぎとどのように出会い、過したのだろうか。再びS先生の報告を掲げる。

◈「くろ」との出会い

五月。三日間の連休が終わって登園してきた子どもたちは、黒と白のまだらの小さなうさぎを見てびっくりした。「かわいい！」「どうしたの？」「つきぐみでかうの？」次々に質問してくる。皆、いっぺんで気に入った。他のクラスの承諾も得て、つきぐみで飼うことになった。二日間かけて話し合った結果、「くろちゃん」と名づけられた。

M男が一番先に「くろ」を抱いて遊びだした。M男はにこにこ顔である。ほとんど一日中「くろ」を抱いていることもある。「くろ」はM男の腕の中でゆられて、目



「くろちゃんにキャベツあげてるんだよ」

を白黒させている。

T男も「かわいい」と言って「くろ」を抱く。しかしすぐにM男が「おい、かせ」と言って連れていってしまう。それでT男は登園時間より早くくるようになった。餌をあげたり抱いたりして、朝のひとときを楽しんだ。

K子も「くろ」の行方を一日中追っていた。私がうさぎの抱き方を話すと、それを皆に伝えた。そしてM男のすきを見ては抱いた。「くろ」はじめはK子の腕の中で落ち着かなかったが、K子の抱き方が上手になるにつれてじっとしていた。

I子は、他の子どもの「くろ」の扱いを見ていて、「あんまりやるとかわいそう」と言ったり、「こうやって抱くんだよ」と教えたりした。

またJ男、H男、S男の三人は、ままごとのコーナーの籠の中にふとんをしき、「くろ」をそこにそっと入れて、餌をあげたり、抱いたりした。

どの子どもも「くろ」がきたことをとても喜び、ちょっとでもいいから抱きたいという気持ちが強かった。数人の子どもたちが一日中、自分たちの遊びの中に「くろ」をいれていることが多く、なんとかして抱きたいと思う子どもの気持ちが交差して、「くろ」の取り合いのけんかもみられた。逆にM男とK子が「くろ」を仲介にして一緒に家をつくって遊ぶようになった。

子どもたちが非常に喜んでうさぎの「くろ」を仲間として受け入れたのかを知ることができる。「くろ」を籠の中に入れておくことに届まらず、ほとんどの子どもはうさぎを抱きたいという強い希望を叶えようとした。その結果、「くろ」はいつも子どもた

ちに抱かれているか、あるいは餌を食べさせてもらっているかということになり、とにかく子どもたちの遊びに参加させられていたのだった。S先生は、うさぎの抱き方を子どもたちに指導した。しかしうさぎの「くろ」が常に子どもに抱かれていることに対する不安を直接子どもたちに伝えてはいない。うさぎは大丈夫だろうかと思いつつ、M男が「くろ」を抱いていることで安定し、その上「くろ」を介してK子と遊べるようになったことや、ほとんど保育室にもどらなかったI子が「くろ」の様子を見に保育室にもどるようになったことなどを見て、これでいいのだと自分に言い聞かせるように毎日を送っていたのである。

ところがS先生の心配が現実となってしまった。それが「くろ」の病気である。

◈「くろ」の病気

五月の三週目の月曜日のこと。「くろ」の腰のあたりに血が見えた。よく見ると、毛がめくれて赤い皮が見える。「あっ、けがをしている」と私とM男が気づき、すぐに籠の中にもどしてやる。M男は「せんせい、(くろは)けがをしています。(だくのは)きんしってかいて、みんなにしらせよう」と言い、籠の入口と幼稚園のあちこちの壁に貼り紙をする。

私は「くろ」がけがをした、そのときを知らなかったし、当然その原因もわからなかったため、自分の迂濶さと、小さなうさぎを抱かせっぱなしで大丈夫だろうかという不安が現実となって、しまったという気持ちが強かった。

子どもたちと相談し、獣医さんに診ていただくことにした。保育後、偶然近くにいたT男、I男を誘って診察をうける。二人とも真剣になって「かわいそうだね、くろはこわいかな」とやさしく見守る。「くろ」は皮膚病になっており、腰のあたりの毛をすっかり刈られ、赤チンと緑色の薬を塗られた。かなり悪くなっており、「もっと早く治療をうけていれば……」と医者に言われ、私は答えようがなかった。

翌日、「くろ」のこのような姿に子どもたちは何も言えなかった。私が薬をつけ、籠の新聞紙を取替えるのを女児たちは見守っている。降園前の集まりで「これから私たちはくろに何をしてあげられるか」を話し合い、餌をあげること、良くなるまで静かにしてあげること、薬

をつけてあげること、家をきれいにしてあげることを考えた。二、三日たって子どもと一緒に薬をつけているとき、「くろちゃんかわいそう」「助かるかな」「死なせたくないよ、まだきたばかりじゃない」と言う。

◈その後

子どもたちは「くろ」から離れて遊び出した。「くろ」に頼っていたようなM男も、木工や泥粘土で楽しむ姿も見られるようになった。他の子どもたちも以前より親しみをもって友だちと関わるようになった。女児はままごとで活発に遊ぶようになった。

子どもたちは自分たちの仲間としてうさぎの「くろ」と関わった。そしてそのような関わりがあったからこそ、「くろ」が病気であることがわかったときに、子どもたちは「くろ」の立場になって感じたり、考えたりしたのである。「くろ」の皮膚病を未然に防ぐことは可能であったかもしれない。しかし、「くろ」が病気になったとき、子どもたちは「うさぎ」という生き物である「くろ」に気づいたのではないだろうか。もちろんそのためだからといって「くろ」が病気になったことは軽視されることなく、考えなければならない問題である。

S先生はこの点について次のように考えている。

「私にとって動物は子どものためにあるものである。飼い始めた時はこういう結果を予想していたわけではなかったが、今でも思いは同じである。しかし、何かそれだけでは済まされないものが私の中にある。子どもたちには『くろ』をかわいいと思う気持ちがあったのか。生命あるものに対して私自身の心づかいはたりなかった。保育の中では保育者のものの考え方が何かの形で伝わっていくと思う。この点について私の心構えは反省させられる。

また、子どもたちにうさぎの扱いをすべてまかせるのではなく、私自身が心配だと思えば、そこで子どもに私の考えをぶつけていくこともできたはずである。私の考えを受け入れたり、『でも、こうしたい』など、自分の考えを言い出す子どももいただろう。一緒に何か良い方法をみつけられたかもしれない。〃保育していくこと〃の姿勢を反省させられた。

それにしても、あちこちに散らばっていた子どもたちが一瞬であっても、ある一点に目を向けさせるほど、うさぎという動物は子どもにとって魅力あるもの、かけがえのないものである。餌をあげたり、撫でたりという接し方にとどまらず、自分の遊びの仲間にいれて、自分と同じようなことをさせるのが見られた。動物

と一体になる、あるいは一体とさせようとする。

動物本来の生き方を考えていくことも必要であるかもしれない。しかし『くろ』が治ったところで、また起きてくるだろう動物の扱い方に関して、動物を自分の仲間と思って遊ぶ子どもたちの気持ちをどうみていったらいいのか、私はまた迷うかもしれない。」

S先生は「生命あるものに対して私自身の心づかいはたりなかった」と反省しながらも、「動物を自分の仲間と思って遊ぶ子どもたちの気持ちをどうみていったらいいのか」と問うている。これは、保育の中で動物を扱うときに保育者が直面しなければならない課題であろう。

保育の中で動物をどう扱うのか

H幼稚園の公開観察日の翌週に、H幼稚園はじめ協力園の保育者たちによって、「保育の中で動物をどのように扱い、考えたらよいのか」をテーマにゼミが行なわれた。

ここでは主に次の二点が中心に話された。

一、子どもが動物をかわいがっているのだからということで、保育者は子どもがしていることをすべて許してしまっていいのだろうか。

二、子どもが動物にしていることに共感してしまった時に、おとなとしての保育者をどのように位置づけたらよいのだろうか。

それぞれの代表的な意見を次に掲げよう。

まず第一点について

「保育者は、幼稚園で動物を飼うことによって、子どもに何を育てたいのかということをしっかりと理解していなければならない。動物を飼うのはいい。しかし子どもが動物をおもちゃのように扱ったときには、はっきりと禁止すべきである。動物が『かわいそうだから』ということで、子どもに思いやりを育てるということではない。保育者は、おとなとして共感しつつ、どうしていったらいいのかを考えることがたいせつである。保育者と子どもとは人間として付き合いをしているのだから、人間として、動物がかわいそうに思ったならば、『かわいそうだ』と言ったり、人間としてほしくない時には『いやだ』と言ってもいいだろう。子どもが動物をおもちゃのように扱った時に、保育者がとめることができないようなら動物を飼わない方がいい。動物をだいじにかわいがって育てることができなければ飼わない方がいい。」

次に第二点について

「動物を扱っている子どもと共感して、その上でおとなとしての役割を考える。たとえば、小さいハムスターと大きいハムスターを同じ籠の中に入れて、ハムスター同志がすさまじいけんかをして、小さいハムスターがケガをした。そのとき、たまたまハムスターがケガをしたために子どもも保育者も反省したが、もしケガをしなかったらどうしただろうか。二ひきのハムスターがいつもけんかをするのだろうか。ハムスターの習性は一ぴきずつ違う。この場合には、ケガをしたハムスターを見て『かわいそう』と子どもと共感する。あるいは保育者は何も言わなくてもいいのかもしれない。おとなとして、すぐその場で感じたことを話したり、話さなかったりする。これがおとなとしての成長なのだろうか。」

動物を死なせてしまうくらいならば飼わない方がいいという意見がある一方、もし動物が死んでしまうような事態が起きた場合にも、まずそれを受け入れ、その上で子どもにどのように対応していくのかを考えることが保育者の成長につながるのではないかという対立する意見がでたのである。

この課題には正答はないだろう。どちらの立場をとるのかについてはそれぞれの保育者にまかされるのである。保育者は場面々々に応じて、禁止したり、拒否したり、あるいは共感したり、だまっていることになる。

現在、それぞれの幼稚園によって、子どもがどのように動物と関わっているのか、また保育者はどの程度配慮しているのか、その方法は様々である。

子どもにとって動物は不可欠の存在であることは確かだろう。そんな動物を保育の中でどのように扱っていくかということについては、それぞれの保育者とそれぞれの子どもがつくり出していくもののようである。これはまさに「保育」を考えることなのである。

（秋草学園短期大学）

*　　*

*